

WANT TO HOLD YOUR HAND / SUDO YASUTAKA

須藤靖貴

抱きしめたい

THE
**DEMAND
& SUPPLY**
ARE

JACK : DRUMS, AHHO : BASS
SHOKEN : GUITAR, MICHIO : GUITAR

講談





講談社文庫

常州大学図書館
蔵書にめいた章

須藤靖貴

講談社

【著者】須藤靖貴 1964年東京都生まれ。駒澤大学文学部卒業後、製薬会社の営業マン、スポーツ誌の編集者などを経て、1999年に『俺はどしゃぶり』（光文社文庫）で第5回小説新潮長篇新人賞を受賞しデビュー。著書に『フルスウィング』『押し出せ青春』『セコンダウト』『リボンステークス』（以上、小学館文庫）、『池波正太郎を歩く』（毎日新聞社）、『どまんなか 1～3巻』（講談社）などがある。

だ
抱きしめたい

す どうやすたか
須藤靖貴

© Yasutaka Sudo 2011



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2011年10月14日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277074-3



講談社文庫

抱きしめたい

須藤靖貴

講談社

抱きしめたい

1

この世で一番かんじんなのはステキなタイミング
そんな唄を聴いたことがある。

おれに降りかかつてきた話も、きつと素敵なタイミングだったのだろう。

弁当を食べおえた昼休みだった。

母親特製の揚げ物弁当をたいらげ、おれは机に突っ伏していた。弁当のおかずはトンカツ、メンチカツ、イカフライ、玉ねぎフライ。ご飯は別箱でチャーハンにしても良かった。こうでもしなければ腹が減って力が出ない。こいつを五分くらいで食べおえた。あまり噛ま^かなかったことを後悔した。気持ちが焦っていると、どうしても早食いになってしまう。

もうすぐ昼休みが終わる。五時限目の開始を告げるチャイムを聞くのが憂鬱だ。

放課後には剣道部の稽古が待っている。カビ臭い部室で剣道着と袴をまとい、胴を着けるときの暗い気持ち。チャイムを聞くとそれを思い出してしまふ。日曜日、サラリーマンが翌日の出社を憂うことを「サザエさん症候群」というらしいが、今のおれは「五時限目チャイム症候群」といったところか。

手の甲に鼻を近付けると籠手のいぶった匂いが染みついている。

強くなりたい、少しでも上達したい。

中学時代に初段を取り、さらに剣の道を極めようと思った剣道部なのに、稽古が厳し過ぎて、気持ちが行かない。

我が県立濯川高校剣道部は県下屈指の強豪だ。先輩後輩の上下関係は凜としていて不満はない。でも稽古が厳しい。顧問の体育教師は五段の腕前で、国体にも出た猛者だ。高校の部活動の顧問なんて、たまに顔を出すくらいでいいのに、剣道部顧問は毎日防具をまとい剣道場に立ち、率先して熱烈指導を行う。なんでも、大学の剣道部員でも音を上げるほどの稽古量だそうで、だから三年から一年まで、毎日が鍛練だった。おれは毎日毎日、体力の限界に挑むようにして竹刀を握っていた。かかり稽古で体力を使い切り、腕が上がりなくなるまで困憊し、しょうがないから身体を相手にぶつけるようにして足を踏み出した。

また厳しい稽古の時間がやって来る。そう思うと憂鬱でしかたがない。

嫌ならばやめればいい。しかし、決心するまでには至らない。部を去ると、剣道を始めたときの生き生きとした自分がいなくなってしまうようで怖い。では、気持ちを強くして稽古に臨めばいいと思うのだが、ツライものはツライ。

おれはつくづくダメ野郎だなと思う。

ごちゃごちゃと考えをめぐらす自分が嫌になつてくる。

そんなときは余計なことを考えず、眠っちまう一手だ。体力を蓄えろ。五時限目開始のチャイムまで、気合入れて眠ってやれと思った。

そのときだった。

「ジャック」

頭の上でニックネームと呼ばれた。

名前が柔一じゅういちで「11」。それでランプのジャックと呼ばれている。

騎士、という意味もあるらしく気に入っている。語感も歯切れがいい。だが、英語教師から、「ジャックは『おまえ』という男の総称で、日本では『太郎』『田吾作』といったところだ」と言われてがっかりした。成績も凡々、剣道部でも補欠。おれにぴったりのあだ名だ。

なんだよ、とぼやきながら目を上げると、学生服が二人、おれを見下ろして笑って

いる。一人はビニール製のギター袋を肩にかけている。

ミチオとショーケンじゃないか。

二人とも、人懐っこい笑顔でおれを見ている。

「ドラムを叩かないか」

ミチオ、遠山三千雄とおやまみちおが言った。

おれは眉を寄せた。

「ドラム？」

ミチオが優しげな顔に笑みを浮かべてうなずく。

「バンドの？」

「もちろん。おれとミチオがギター。ベースとドラムを探してる。ジャック、おまえドラムやれ」

ショーケンが言った。本名は伊江田健いえたけん。あだ名の由来は定かではないが、歳の離れた長兄が証券会社に勤めていることからきているらしい。

「いきなりなんだよ。ドラムなんて……。やったことないぜ」

「誰だって最初は初心者だ。剣道部だろう。竹刀もスティックもそれほど変わらねえよ。ズブのシロウトよりずいぶんリードしてる」

ショーケンが笑う。おれも苦笑した。

「バンドつてさ、死ぬほど練習するんだろ。そりや無理だ。こう見えても忙しいし」

おれはそう言つて、右手を手刀にして「メン！」という具合に前に出した。

その手を、ショーケンにびしやりと払われた。

「剣道部なんてやめちゃえ」

え？ とおれは声を出した。

「ジャックは剣道部をやめたいと思つてるな。そうだろ」

ミチオが言つた。おれはミチオの顔を黙つて見つめた。

「顔にそう書いてある。やめちゃえ。やめて、おれたちとバンドを組もう」

優しいトーンに強い芯がある。ミチオとショーケンの顔を交互に見た。ミチオは頬ほおを上げての笑い顔。ショーケンはいつもの薄ら笑いだ。

「天下泰平の世だ。剣の腕みがを研ぐ時代じゃないぜ。メンのかわりにドラムを叩いてくれ。剣豪が乱世に名を刻みこむように、素晴らしいビートを刻んでくれないか」

ミチオの言葉に、おれは笑つてしまった。

「なに言つてんだ。なにが素晴らしいビートだよ。からかわないでくれ」

「本気さ。おれたちのバンドにはジャックが必要なんだ」

「なんで……おれなんだ。まるっきりのシロウトだぜ」

「雰囲気的なもんだ。きつかけなんて、そんなもんでいいんだ。ギターが二本そろつ

てる。あとは練習でなんとかなる」

ショーケンが言った。

ショーケンはハードロックバンドのギタリストだ。一年のときに公民館でのライブを観たが、ものすごい速弾きを目の当たりにして呆氣にとられた。そのときのドラムスは……よく覚えていないが、速く力強いビートを刻んでいたように思う。

おれにあんなドラム、叩けるわけがない。

「ジャックは、どんな曲、聴いてるの」

ミチオの問いに、おれは「エレカシ」と答えた。エレファントカシマシだ。

「いいね！」とショーケン。

「いいじゃん。気合、入ってるじゃん」

おれはエレカシが大好きだ。高校生が聴くにしては大人のバンドだけど、ボーカルの力強さ、熱気、歌詞の真剣さ、熱さ、そしてバンド全体の雰囲気がとても気にいつている。聴いていると胸が熱くなり、やる気がわいてくる。厳しい練習に向かうときに、エレカシにはいつも世話になっている。

「エレカシ、赤羽出身なんだよな。荒川^{あらかわ}つながりじゃないか」

ミチオが言う。ショーケンもあいづちを打つ。

「ベースもほぼ決まってるんだ。これから口説きに行く。ジャックも来いよ」

「ほぼ決まってるのに口説きに行く、ってのが分かんないな。それに、来いっていったって、おれはやるとは言つてないぜ」

「いや。ドラム、やってみようかなって顔をしてるよ、ジャック」

ミチオが言う。本当かよ、と思う。いい加減なことを言つても、妙に説得力を帯びて聞こえるのだ。優しい物言いが頭に染みこむせいだろうか。

ミチオもギターの名手だ。すらりと長い脚。色白で優しげな顔立ち。やわらかそうな長い髪。はつきりと女にモテそうだった。ただし、病弱な美少年という雰囲気を漂わせている。体育の授業はいつも見学だった。走れないらしい。理由は分からない。ふつうに歩くことはできるのだが、ふくらはぎから下の筋肉が弱いという。

ショークンも端正な顔立ちをしている。ただしミチオとは違つて不良っぽさのスパイス入りだ。劇団に入っていたことがあり、何度か子役でドラマに出たという。優等生の役で、いかにも勉強ができそうな抜け目のなさそうな顔立ちをしている。しかし、事實は逆で、まるつきり勉強ができない。見事なくらいにできない。頭の中身が外見を思い切り裏切っている。濯川高の場合、中間テスト、期末テストの総合点がクラスごとに公表される。一年時、ショークンは常にクラス最下位だった。おせっかいなヤツが他のクラスの最下位者の総得点を調べてみたところ、学年でも最下位であることが判明した。

不思議なのは、なぜショーケンのようなトンチンカンが濯川高に入学できたか、ということだ。いちおうは県下有数の男子進学校である。それを問いたですと、「直前にやった塾のプリントがビンゴでな。本番はほとんど満点だった」と言った。ショーケンは勝負強いのだろう。しかし、濯高を受けるということは内申点も良かったはずで、中学時代は勉強ができたということだ。高校入学直後に脳震盪のうしんどうでも起こしたのだろうか。そのへんが謎に包まれている。

おれはミチオともショーケンとも、特に親しいわけではない。ショーケンは一年のときに同じクラスだったが、あまりしゃべったことはない。ミチオには物静かなイメージがあり、休み時間には音楽雑誌などを読んでいる。

いやいや。おれは心の中で首を振った。クラスの連中とはみなふつうに仲がいいのだ。だが剣道の練習がおれの一日の大半をしめ、クラスの友達と喫茶店やゲームセンターへ行く時間も気力もないだけだ。

「ところでさ。いったいどんなバンドを組むんだ。ハードロックか」

「ビートルズだ」

「ビートルズ？」

「ビートルズの完コピ。メンバーは四人。襟えりなしスーツでビシッと決めるぜ」

ミチオが言う。襟なしスーツっていったって、今おれたちが着ている学生服のこと

じゃないか。

「ビートルズの曲で、なにが好き？」

ミチオの声が能天気だ。いきなり、どの曲が好きって言われたって。

「少しは知ってるんだろ。なんたってビートルズなんだから」

「そりゃあ、聴いたことくらいは。『プリーズ・プリーズ・ミー』とか、『シー・ラヴズ・ユー』とか」

ミチオは満足そうにうなずいた。

「いいねえ。『イエスタデイ』とか『レット・イット・ビー』とか言わないところがいい。いいセンスだ」

「知ってる曲を適当に言っただけだぜ」

「どんな印象だった？ 曲を聴いて」

「……そうだな。なんか、弾けた感じかな」

的を射ている、とミチオ。

誉められて、おれは苦笑して首を振った。

「でもさ。ショークンはハードロックじゃないのか」

「古典に戻るのも悪くないさ」

「じゃあ、ベースは誰だ。ビートルズのベースってすげえ難しいんだろ」

ミチオが笑顔をさらに穏やかにして指を鳴らした。な、とショークエンに言った。「ジャック。もうベースのことを気にしてるぜ」

苦笑するしかない。ショークエンも笑う。

「おれもミチオに釣り上げられたのさ。『七人の侍』の勧誘シーンみたいだ」

「その点、ビートルズは四人でいいからラクだ。じゃあベースを決めに行こうか」

おれは机を鳴らして立ち上がった。ショークエンが肩にかけているギター袋が、剣豪のやりさや槍鞘に思えた。